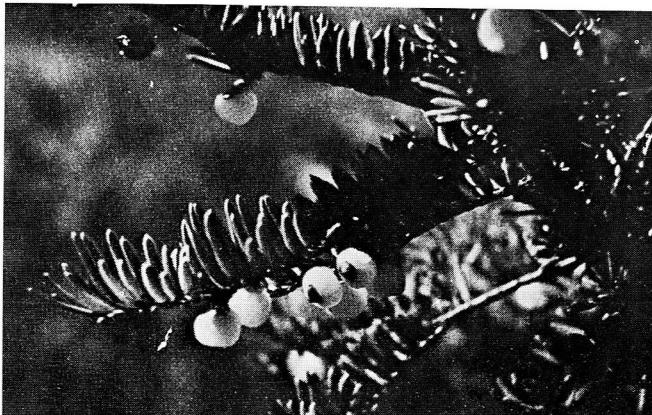


# 有毒植物(9)

北大薬学部教授 三橋 博

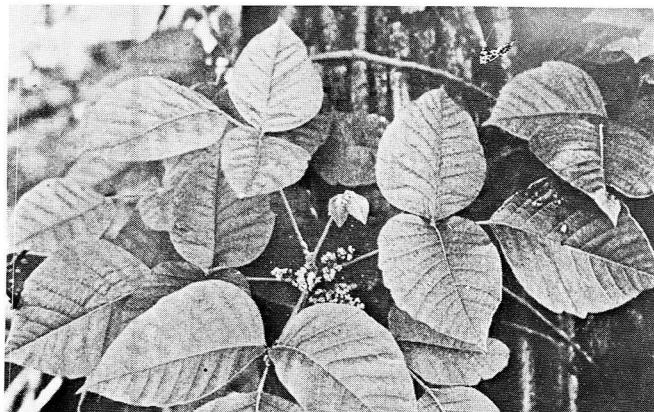


イチイ (イチイ科)

## ツルタウシ (ウルシ科)

北海道から九州にかけて山野に広くはえる。落葉の木質のつる。他の上をはい、気根をもって密着するもので高さ3m位、葉は3出複葉、小葉は卵形、全縁、秋には紅葉する。

全草にラッコールなる成分を含み、漆にかぶれ易い人はこの植物の毛、又焼く煙でもかぶれる。もしこの植物にふれたと思ったら普通の洗濯石鹼でよく洗うことが最もよい。有毒成分は石鹼水に可溶であるが、化粧石鹼よりは若干アルカリ性の洗濯石鹼がよい様である。皮膚にかぶれが出た時の治療は極めて多数の民間治療の方法が知られている。



ツタウルシ (ウルシ科)

## おわりに

家畜の中毒事故については実際のところあまり知らないが、人間の中毒事故、ことに子供の中毒は、時折報じられるが、中毒症状がどの様な程度であるか個々のケースについて判断すべきである。

中毒の原因になった植物が正確にわかることはその後の治療に有益である。平素から有毒植物、薬用植物について若干の知識を有することは必要で、中毒の際もその植物を口で説明しても相手（医師等）はその植物を了解する事が困難であるが、実物を示せばはっきりする。

推理小説じみるが北大小児科に中毒の子供が二人

入院した。担当医は死体の臭いがすると連絡して來たので、呼氣の中にホルマリンが出るであろうと考え、その様な成分の含まれるのはソテツの実の中毒と考えたが、矢張り九州の親せきから送られたものを留守中子供が口に入れ中毒したことが判明した。

植物の毒性は季節、とりこんだ量、植物の部分により異り、患者の年令により症状が大きく異なる。

一般に医師に中毒した植物を示し、処置をまかせる事が最上である。

また中毒患者をまず吐かせる事は有効である。